

特集

何を目指すチーム医療

チーム医療により、医療・生活の質の向上、医療の効率性を高めることによる医療従事者の負担軽減、および医療の標準化・組織化を通じての医療安全の向上が期待されている。総論としては、誰もが賛同する目的であり、チームを適切に編成し、役割分担を規定すれば達成できるはずである。だが、第一の難関は、医療においては、各職種の役割は法律等によって規定されており、他の分野のように社会環境や組織のニーズの変化に対して柔軟に対応できないことにある。

第二の難関は、各職種の役割を変えるには、まず教育・研修の体系を整備し、次に課程修了者に対して、技能が担保されていることを認証する必要がある。ところが、教員の意識を変えることも、研修指導者を育成することも容易でない。教員として登用するに当たって、資質・能力は学内の基準で審査され、一旦、教職につけば教育内容において大きな裁量権がある。したがって、ニーズの変化に対応するインセンティブは必ずしも高くなく、権威の源泉である研究は学問の自由によって守られている。

第三の難関は、医療職者の処遇は、他の分野と同じく、労働市場における需給関係によって決まる。だが、医療における特異性は、供給が各職種の養成学校の定員によって規定されていることにある。したがって、当該職種に対する需要が、業務の拡大によって増加すれば、給与等の処遇条件は改善し、加えて賃金以外にも、専門職としての意識が高まる。ところが、パイは限られているので、各団体の主張を調整することは容易でない。

こうした難しい状況下で、厚生労働省の医政局は法規定を整備し、保険局は診療報酬において「評価」（点数と請求条件の設定）することによって、コストを保証するだけでなく、政策目的に沿って医療機関を誘導してきた。「評価」は質と安全の向上、というエビデンスに基づいて実施する方向性にあるが、信頼性の高いエビデンスを短期間に提示することは困難である。本特集では、病院医療の効率的な展開という原点からチーム医療のあり方を探ったが、問題の難しさを改めて実感した。

池上 直己

慶應義塾大学医学部 医療政策・管理学教室 教授